

■紀貫之 歌人。「古今集」で衰退していた和歌を復興させ、初の仮名文学「土佐日記」で王朝文学を産んだ大デザイナー。

きのつらゆき
藤原良房没

872= この頃、古代の栄光を背負いながら没落した名門豪族紀望行の子に生まれる。母は内教坊伎女らしい。

律令制は、中国唐のものを模倣することから始められたため、公文書は全て漢文、文学もまた全て漢詩文という唐風文化に席卷されており、和歌は公的な場から消え、男女の恋文にのみ残っている有様で、貫之も、のちの「古今集」仮名序に'色ごのみの家に埋れ木の人知れぬこととなり'と記するような環境のなか、

..... 886= 6歳：この頃、父を失い、紀有常らから家系の誇りを教えられて成長したと考えられる一方、和歌に魅了され、

基経太政大臣 880= 8歳：とくに、この年死去した在原業平に憧れを抱いて、

..... 881= 9歳：

天皇の孫でありながら政治の表舞台で活躍できず、自らのつらい心情を吐露する一方、美男で、あふれる恋心を表現し、天性の歌人ともいえる在原業平、その歌人仲間の小野小町、僧正遍昭など、のちに六歌仙と称される、彼らを追いかけるように和歌に没頭、

宇多天皇即位 887=15歳：

屏風歌歌人としてスタートして、想像力に磨きをかけ、

基経関白辞任 890=18歳：

親王や皇后の歌合出詠し、

..... 893=21歳：菅原道真が編纂した「新撰万葉集」にも採用されるも、相変わらず、日本語の音を全て漢字に当てた万葉仮名で書かれ、その左には漢詩の訳が添えられるような有様であったが、

遣唐使廃止 894=22歳：その道真の提案によって、遣唐使が廃止となり、改めて国内に目が向けられるようになるなか、

歌人として評価される道を歩むうち、

..... 898=26歳：花合でも出詠したり、曲水宴を催して作歌。

道真右大臣 899=27歳：

菅原道真左遷 901=29歳：漢学者道真の左遷によって、天皇家の外戚たる藤原氏の後宮対策仮名文化への抵抗が払拭され、

初の荘園整理 902=30歳：中宮の屏風歌。

道真没 903=31歳：この年内蔵助に抜擢された藤原兼輔と親交するなど、パトロンも得るなか、醍醐天皇から、初の勅撰和歌集になる「古今和歌集」の撰者に大抜擢され、ともに選ばれた、同じく身分は低くも和歌復興の情熱あふれる、従兄の紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑と、内裏の一隅に与えられた部屋で、集められた作品をもとに、和歌の魅力を広く伝えるにはどうしたら良いか議論白熱するうち、いわゆる"型"をつくることを提案、単に年代順や作者別にするのではなく、四季、恋、旅などテーマ別に巻に分類する歌集としての型を持ち、春なら"梅に鶯"、秋なら"月に雁"など、情景を借りて、心を表す表現の型、言葉の見本帳のようにした、

古今和歌集 905=33歳：これ以前、御書所預。*いわば国家事業としての「古今和歌集」を完成、中身全てが仮名だっただけでなく、やむを得ず漢文(真名)の序はつけたものの、和歌史を批判する画期的な仮名の序をつけて奏上、のちの人たちがそれを根拠にするような"型"となって、朝廷の歌合が和歌になったのを皮切りに、国風文化の幕開を告げ、日本人共有の美意識をつくり、王朝文学を開花させることになり、

..... 906=34歳：越前権少掾。以後も官職は不遇で、

唐滅亡 907=35歳：内膳典膳。大井河行幸に供奉し、和歌を詠む。

..... 908=36歳：

..... 910=38歳：少内記。

..... 913=41歳：大内記。「亭子院歌合」「内裏菊合」に出詠。

..... 917=45歳：従五位下、加賀介。

高麗建国 918=46歳：美濃介。

「古今和歌集」には、憧れの在原業平の和歌30首を採用しているが、この間、業平の和歌をもとに歌物語「伊勢物語」が作られ、歌人に必須の教養として重視され、次第に今日の形にまとめられていったとされるているが、「土佐日記」に引用していることから、その基幹部分は紀貫之によるとする説も多いが、

道真本官復位 923=51歳：大監物と、官職は遅々として進まず、

延喜式撰進 927=54歳：以降、もっぱら醍醐天皇の求めに応じて屏風歌を詠むうち、

..... 929=57歳：右京亮。

忠平摂政復活 930=58歳：土佐守に任じられ、醍醐天皇から「古今和歌集」を抜粋した、新和歌集の編纂を命じられた後、現在の高知県南国市に赴任。国司として地方行政を担う。和歌はもちろん、京都のものを色々携えて来たり、土佐国分寺の近くに、京都の日枝神社の御霊を譲り受けて分社を建立し、衣笠のように、京都に近い風景を見出だしては、同じ名ついたりして当地に大きな影響を及ぼし、政務のかたわら新和歌集の編纂も進めるうち、

宇多上皇没 931=59歳：醍醐天皇が死去、つづいて宇多上皇、

..... 932=60歳：和歌の良き理解者だった右大臣藤原定方、

..... 933=61歳：親交してきた権中納言藤原兼輔など、後ろだてとなっていた有力者が相ついでこの世を去ってしまう。

..... 934=62歳：誠実に職務を果たして任期を終え、土佐国府を出発。「古今和歌集」で和歌がブームになったものの、拡がりをみせていないことを思い、新たに読みやすい物語にして普及させようと、おそらく「万葉集」がさまざまな階層の人たちが詠んだ歌を集めたものであったことにも思いをいたしながら、

承平天慶乱始 935=63歳：*帰京すると、それまで男性が漢文で記述するのが当たり前であった日記を、土佐を出発して帰京するまでの日記の体裁で、初の仮名文学となる歌日記「土佐日記」を創作、冒頭の'男もすなる日記といふものを女もしてみむとしてするなり'に続いて、土佐を離れる浦戸の港には別れを惜しむ地元住民たちが集まり、皆口をそろえて和歌を詠んだというところから始まる「土佐日記」は、女性はじめ広く民衆に和歌を広めて、その想像・創造力を掻き立てることになる。「土佐日記」は中国文学に対抗した究極の日本語テキストであり、初学者への和歌入門書であるとともに、のち盛んに登場する歌論書であったとさえ言えるという。

..... 937=65歳：醍醐天皇の遺勅を奉じた「新撰和歌」は陽の目を見なかったがなお、その後も、藤原忠平一族の求めを中心に、屏風歌を詠み続け、しきりに官職なきを訴え、

..... 940=68歳：玄蕃頭。朱雀院別当に再任。

承平天慶乱終 941=69歳：

この間、自ら「貫之集」を編むが、前半部は500首を超える屏風歌で占められ、誇りの大きさが分かる。

..... 943=71歳：26年を経て、ようやく従五位上に昇進。

..... 944=72歳：「新撰和歌」の上梓をあきらめて、孤愁の心境をこめた序文を本音で表すべく漢文で記して、

..... 945=73歳：木工権頭となって、

村上天皇即位 946=74歳：没した。

和歌オタク、仮名オタクだった紀貫之の「古今和歌集」と「土佐日記」によって、日本人の美意識を確立し、平安時代後半に、貴族文化の中心に和歌が据えられることになり、紫式部の「源氏物語」など王朝文学が華開いたことを思えば、まさにデザイナーであったといえよう。